Japanese Association for Religious Studies

この三願というのは、真宗の根本所依の経典といわれる大無量寿経にある、四十八願のうち、十八願、十九願、二十願という意味である。また転入というのは、転捨帰入の略で、自分のそれまでの心を転じて捨てさり新しい悟りの世界に入る（帰入）という意味である。すなわち、三願転入とは、三つの願を経て最終的な悟りの境地に入ったということである。

親鸞は、三願転入において行者の努力や修行の功徳でもって成仏することを誓われた十九願から、行者が念仏を励みその功徳により成仏することを誓われた二十願に転入し、またそこから行者が思いはかることの出来ない念仏の不思議な功徳により成仏すると誓われた十八願に転入することを示したのである。

C・ロジャースは、彼の出世作である「カウンセリングと心理療法（一九四二）」において、カウンセリングの過程を大きく三つに分類している。

まず第一の過程は「感情の解放」である。すなわち、クライエント（以下、cl.とする）の感情を解放することにより、こころの奥底に潜在する問題を表出させる。このことによりcl.は、それまで抑圧されていた感情から情動的に解放され、自分自身の感情を素直に認知すると共にカタルシス（心の浄化）へと導かれる。

このカタルシスが次の過程である「自己洞察の成就」に結びつくのである。自己洞察は、カタルシスの経験から離れて存在するものではない。この自己洞察により、以前は認知していなかった新しい関連性に気づき、自己受容が可能となり、新しい目標設定が出来るようになる。そして、新しい自信と独立心が養われる。

最後が「終結の段階」である。cl.に自信と独立心が養われると、cl.はカウンセリングを終えたいと望むとともに、同時に支えを失うことへの不安をもつ。この両価性をcl.は、はっきり自覚し、自分の問題として認識し、建設的に立ち向い自己決定することでカウンセリングは終結する。

人の心の悩みに対応する、宗教的アプローチと心理的アプローチにおける心の変化過程は、いづれも大きく三つの過程に分類できる。宗教的アプローチの過程は、経典にみられる三願の中において、如何なる功徳において成仏するかが重要な課題であり、心理的アプローチの過程は、cl.が如何に自分の感情をカタルシスに導き、自己洞察し、自立するかが重要な課題である。

真宗信者の宗教意識と社会的行動に関する調査

ウーゴ・デッセイー

真宗ではこれまで倫理と社会運動という問題が慎重に扱われてきた。その主な理由は、創始者親鸞（一一七三―一二六二）が重視した「はからい」という教義、つまり自分の打算を捨てる必要性にある。親鸞は、人間は「はからい」を捨て「他力」という阿弥陀の働きに自らを任せることができると考え、「自

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

力」による善行が「信心」という中心的宗教体験と浄土「往生」の障害になると主張した。しかし、親鸞は道徳の実践を不可能と考えていたのではなく、むしろ道徳を「他力」という考えに従って慎重に考察すべきと見ていた。

真宗教団における他力信仰と社会行動の間の問題、および真宗道徳の特性を確認するため、本稿筆者は二〇〇八年に日本の二六都道府県の真宗信者四〇〇人に対し、調査を実施した。回答者のほとんどは本願寺派・大谷派に属する門徒（二八〇人）と僧侶（一二〇人）だが、門徒の平均的態度が明らかになるように、総代を約一割に制限した。

この調査の目的は二つある。ひとつは真宗信者の道徳観と社会行動の関係を個人レベルで研究すること。もうひとつは門徒の道徳観と宗教意識との関連性を確かめること。以上を踏まえて、利用する宗教意識の指標を二グループに分けた。

（1）第一のグループには真宗実践・信仰に関連する項目が含まれる。つまり帰敬式を受ける、報恩講によく参詣する、朝夕の勤行をよくする、法話をよく聞く、真宗聖典・宗教書をよく読む、念仏の実践を正しく理解できるという六項目である。

（2）第二のグループには「神祇不拝」（神々の崇拝の拒否）と関係している項目が含まれる。つまり神棚にお供えをしない、お守り・お札を持たない、地域の神社行事に参加しない、初詣でをしないという四項目である。

以上の調査結果は、次のようにまとめられるだろう。

他力という教義は必ずしも信者の道徳性に障害になるわけではないようだ。個人レベルでは善行への意識があり、真宗的道徳の特性を表す要素が見られる。全体的に、「心の平安」、つまり宗教的・精神的生活への傾向があるが、それは社会活動への意欲・参加に乏しいことを意味するのではない。だが、特に門徒の場合は政治的に中立の活動に参加する傾向が明らかである。

回答者には「思いやり」重視の姿勢が顕著だが、最も重要な価値観として、日本の伝統的価値観である「協力」、「正直」、「礼儀」、「人への尽力」、「親孝行」を選ぶ信者が多い。信者が「親孝行」を選ぶ割合の方は、全国平均と比較すると低い。日本の伝統的価値観「恩返し」と重なる「報恩・仏恩への報謝」という宗教的価値観はよく強調されている。

僧侶より、門徒の方が権威主義的価値観を重視するが、全国平均と比べれば、その支持率はある程度低くなる傾向がある。そのため、真宗信者の伝統的傾向が権威主義的価値観に一致するとは言いがたい。だが、権威主義的価値観と宗教意識には関連性が見られる。

真宗信者が「平等」という真宗的及び近代的価値観を重視する様子はある。この概念は念仏者の平等以外に、おそらく他の社会問題に当てはまるが、他宗教の信者の宗教的平等は全面的には認められていないようである。それに加えて、宗教的排他主義と自民族・自文化中心主義には関連性が窺える。

また、信者の道徳観念はもう一つの真宗的及び近代的価値観によって特徴付けられている。即ち、真宗教団では「非暴力」が重視され、それが平和と死刑制度に対する信者の姿勢に意味合いをもつようなのである。

NII-Electronic Library Service